

SPECIAL EXHIBITION COMMEMORATING
EXPO 2025 OSAKA, KANSAI

JAPAN

AN ARTISTIC MELTING POT

April 19–June 15, 2025

出合いは、海を越える。
日本美術の名品が一挙集結

大阪・関西万博開催記念
特別展

日本、 美の つぼ

異文化
交流の軌跡

2025年
4月19日(土)―6月15日(日)
京都国立博物館 KYOTO NATIONAL MUSEUM
平成知新館(東山七条) 圖

【開館時間】午前9時～午後5時30分(金曜日は午後8時まで ※入館は各閉館の30分前まで)

【休館日】月曜日 ※ただし、5月5日(祝日)は開館、5月11日(水)は休館

【主催】京都国立博物館、朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKエンタープライゼス近畿

【後援】公益社団法人2025年日本国際博覧会協会(「協賛」NISHIDA)

国主 風神雷神図(複製) 徳川幕府 京都 建仁寺(複製) 協賛 NISHIDA
富田 十六景 神奈川沖浪裏(複製) 葛飾北斎 山口県立美術館 津上記念館(複製) 京都府立総合資料館(複製) 展示

PRESS RELEASE

開催趣旨

この度、京都国立博物館ならびに朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿は、交流をテーマに日本の美術をとらえなおす特別展「日本、美のるつぼ―異文化交流の軌跡―」を開催することとなりました。

大阪・関西万博は、持続可能な社会を、国際社会との共創によって推し進めると謳っています。日本の古美術は閉鎖的で変化に乏しいと見られがちですが、実際は古今東西の芸術文化が混じり合いダイナミックに形づくられてきました。現代に伝わる名品も、海外交流のなかで産み出されたものが少なくありません。大陸から列島にわたった技術や製品は、憧れとともに受容され、ときには誤解を伴った模倣や改造を加えられながら後世に継承されました。弥生、古墳時代の美しい青銅器や金工品、古代や中世の仏教芸術、漢字、水墨画、精巧な工芸品などがすぐに思い浮かびます。逆に、日本では大衆的な商品にすぎなかった浮世絵が海外で評価され、今では日本美術の代表格となっていますし、伊万里焼や輸出漆器のように異国の商人との共同作業によって創り出され、日本の顔として世界各地で愛されてきた美術品もあります。

世界中から最新技術が集まるこの機会に、交流の軌跡をたどり、日本美術の底力を再発見します。

開催概要

展覧会名	大阪・関西万博開催記念 特別展「日本、美のるつぼ―異文化交流の軌跡―」
会期	2025（令和7）年4月19日（土）～6月15日（日） [主な展示替] 前期展示：4月19日（土）～5月18日（日）／後期展示：5月20日（火）～6月15日（日） ※会期中、一部の作品は上記以外にも展示替を行います。
開館時間	午前9時～午後5時30分（金曜日は午後8時まで）※入館は各閉館の30分前まで
休館日	月曜日 ※ただし5月5日（月・祝）は開館、5月7日（水）休館
会場	京都国立博物館 平成知新館（〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527）
主催	京都国立博物館、朝日新聞社、NHK 京都放送局、NHK エンタープライズ近畿
後援	公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会
協賛	NISSHA
お問い合わせ	075-525-2473（テレホンサービス）
京都国立博物館公式 HP	https://www.kyohaku.go.jp/
展覧会公式サイト	https://rutsubo2025.jp/
公式 X・Instagram	@rutsubo2025

※観覧料、イベント等の情報は決まり次第展覧会公式サイト等でお知らせします

見どころ

1 交流を軸にとらえなおすと見えてくる、あの名品の新たな横顔

19世紀末、欧米で万国博覧会が華やかなりしころ、西洋人が抱いた日本美術のイメージは、安価な輸出工芸品や骨董品を基にしていました。もっと立派に見られたい一心から、明治政府は、日本の独自性を強調した官製の日本美術史を整えます。国宝や国立博物館といった制度は、まさにこの枠組みを受け継ぐものですが、私たちに伝えられた品の多くはむしろ、様々な文化が溶け合うことで生まれたものであることを、自ら物語っています。世界に見られた日本美術、世界に見せたかった日本美術、世界と混じり合った日本の美術という視点の冒険を、名品を通して体験しましょう。

2 出展総数約 200 件、巡回なしの京都限定開催

国宝 18 件、重文 53 件を含む約 200 件の作品を通じて、日本美術の多様性に出会いましょう。

※国宝、重要文化財を含めた出展件数は増減する可能性があります。

= 「るつぽ」 って？ =

もとは、金属を溶かしたり化学実験をしたりするために、物質を高温で熱するのに用いる耐熱性の容器。転じて、種々のものが混合、融合することをたどっていきます。本展では、日本列島にもたらされた様々な異文化が混ざり合い、美しい品々を生み出してきた歴史を「日本、美のるつぽ」と題し、その旅を楽しみます。

= 官製の日本美術史 =

明治 33 年（1900）のパリ万国博覧会への参加を契機に、明治政府は日本初の西洋式の日本美術史を編纂しました。フランス語で刊行されたその『Histoire de l'Art du Japon』は、世界に見せたかった日本美術を発信しました。翌年、和文でも刊行された『稿本日本帝国美術略史』は、いわば政府公式の美術史として、現代の私たちが認識する日本美術史の原型となりました。



《Histoire de l'Art du Japon》（日本美術史）
巴里万国博覧会臨時博覧会事務局編
明治 33 年（1900） 京都国立博物館所蔵

世界に見られた日本美術

日本が近代国際社会にデビューしたころ、西洋の市場には、以前から輸出されていた伊万里焼や輸出漆器に加え、日本で使われなくなった印籠や根付、刀装具、古い浮世絵などが大量に出まわり、日本美術のイメージを作り上げていました。明治政府は、万博への参加を通じて殖産興業を図る一方で、西洋の芸術や美術、工芸、工業といった概念に合わせて、「ファイン・アート」の出品を奨励し、国の威信を高めることに努めました。

富嶽三十六景 神奈川沖浪裏、凱風快晴、山下白雨

葛飾北斎画 江戸時代 天保2年(1831)頃 山口県立萩美術館・浦上記念館所蔵
[前期展示 ※後期は和泉市久保惣記念美術館所蔵品を展示]

ゴッホが激賞し、ドビュッシーの交響曲からクロードルの彫刻にまで波及した「ビッグ・ウェーブ」こと「神奈川沖浪裏」は、今日にいたるまで北斎のアイコンであり続けています。19世紀後半、ジャポニスムの隆盛にともない西欧において不滅のものとなった北斎の名声は、近代日本における北斎評価にも多大な影響を及ぼしました。



富嶽三十六景 神奈川沖浪裏



富嶽三十六景 凱風快晴



富嶽三十六景 山下白雨



しきしだんせんちらしま きえりょうしばこ すずりばこ
色紙団扇散蒔絵料紙箱・硯箱 江戸時代 19 世紀 京都国立博物館所蔵 [通期展示]

日本が国家として初参加したウィーン万博からの帰国時、展示品を載せたニール号が伊豆沖で沈没しました。本品はその約 1 年半後、海底から引き揚げられた積み荷の一部です。奇跡的な保存状態が注目され、蒔絵が豪華客船の内装に採用されるきっかけを生みました。水滴の錆や硯石の藻の付着跡に受難が偲べれます。

世界に見せたかった日本美術

明治政府は、西洋人のエキゾチシズムを満たすばかりでなく、日本が「美術」や「歴史」を持つ「文明国」であることを示す必要を感じていました。そこで、1900 年のパリ万博では、日本初の西洋式日本美術史をフランス語で編纂し、豪華に装丁して展示しました。現在の国宝や重要文化財を数多く収録する本書は、翌年には和文でも刊行され、現行の日本美術史の基礎となりました。また、西洋人の反応を受けて「琳派」が日本らしさの典型として認識されるようになったのも、この時期のことです。



重要文化財

とっせんちゅうごしきどうたく
突線鈕五式銅鐸 滋賀県野洲市小篠原字大岩山出土

弥生時代 1～3 世紀 東京国立博物館所蔵 [通期展示]

高さ 134.7 cm、重さ 45.5 kg と、現存する日本最大の銅鐸です。吊り手は幅広で、飾り耳とよばれる装飾がついており、吊り下げて鳴らす鐘としての機能を失い、据え置いて見る銅鐸へと変容していることがわかります。本品は銅鐸のなかでも最終段階のものであり、『Histoire de l'Art du Japon』には日本の初期の美術における金工の代表例のひとつとして掲載されています。

重要美術品

はにわ 埴輪 くわ かつ だんし 鋤を担ぐ男子

伝群馬県太田市脇屋町出土

古墳時代 6世紀 京都国立博物館所蔵
[通期展示]

『Histoire de l'Art du Japon』では、日本の木像や塑像、銅像の起源として埴輪が紹介されています。本品は、埴輪の男子像で、髪を美豆良に結び、帽子・首飾りを着け、左腰に大刀を佩き、右手で鋤を担いでいます。髪型や持ち物の特徴から中間的な階層の人物とみられ、農作業を指揮する役割の人物である可能性があります。



じぞう ぼ かつぞう
地蔵菩薩像

鎌倉時代 14世紀 東京国立博物館所蔵 [後期展示]

『Histoire de l'Art du Japon』の鎌倉時代の絵画の章で図版が掲載された4点のうちの1点で、しかも本全体で数枚しかない多色刷りの木版画にされていることから、鎌倉時代を代表する名品として扱われたことが知られます。

国宝

ふうじんらいじんずびょうぶ
風神雷神図屏風

たわら や そうたつ
俵屋宗達筆

江戸時代 17世紀 京都・建仁寺所蔵 [通期展示]

今や誰もが知る国宝ながら、江戸時代における消息は定かでなく、本作の存在が広く知られるようになったのは明治時代後半になってからのことです。先んじて西欧で高く評価されていた尾形光琳、そして酒井抱一へと連なる琳派概念の形成は、近代国民国家として歩み始めた日本が必要とした「伝統の創出」でもありました。



世界と混じり合った日本の美術

官製美術史が、西洋式に絵画、彫刻、建築を重視し、日本らしさを強調することを命題としたのに対し、実際に日本に伝世した美術品の多くは、暮らしに根ざし、海外との活発な交流を物語っています。この展覧会は、海を超えて行き来した人々、技術、観念の軌跡を、日本に伝わる名品に辿ります。かつて、交流のるつぼの中で滾っていた品々を、新たな視点で味わい尽くす機会となれば幸いです。



重要文化財 よししたけた かぎいせき 吉武高木遺跡 さんごうもっかん ぼ しゅつどひん 3号木棺墓出土品 福岡市西区 吉武高木遺跡出土
多鈕細文鏡、細形銅剣、細形銅矛、細形銅戈、勾玉、管玉

弥生時代 紀元前3世紀 国（福岡市博物館管理）[通期展示]

青銅製の鏡（多鈕細文鏡）と武器（矛・戈・剣）は朝鮮半島で作られました。勾玉と管玉は首飾りで、それぞれ新潟県糸魚川産のヒスイ、朝鮮半島産の碧玉が使われています。鏡、剣、玉という、いわゆる「三種の神器」がセットで副葬された例としては最古のものです。朝鮮半島と繋がりのある、福岡・早良平野の王の墓と考えられます。

重要文化財

さんさいゆうこつぞう き 三彩釉骨蔵器 和歌山県橋本市名古曾古墓出土

奈良時代 8世紀 京都国立博物館所蔵 [通期展示]

奈良時代に唐三彩の技術をもって日本国内で生産された奈良三彩の代表例です。透明釉（白釉）と緑釉、褐釉の3色の釉が織りなす斑点状の文様は唐三彩の施釉技法であり、その一方で、器形は日本の須恵器にある薬壺形をしています。中国・唐の技術を積極的に導入しつつも、日本での用途や好みに合わせて柔軟に改変している様子がうかがえます。





国宝

ほうそうげかりょうびんがまきえそくさっしぼこ
宝相華迦陵頻伽蒔絵壘冊子箱

平安時代 延喜 19 年(919) 京都・仁和寺所蔵 [通期展示]



この箱の蓋には、空海が唐から持ち帰ったお経を納める箱、と蒔絵で書かれています。空海の死後、散逸の危機にあった貴重な経典を、醍醐天皇が集めさせてこの箱に納めました。文様は、唐の影響が濃厚な正倉院宝物のように求心的に整然と配置される一方で、極楽浄土で仏法をさえずるという霊鳥、迦陵頻伽の顔立ちは和風で、踊ったり楽器を奏でたり、全員がちがう姿をしています。

重要文化財

ほうしおしょうりゅうどう
宝誌和尚立像

平安時代 11 世紀 京都・西往寺所蔵 [通期展示]

宝誌和尚は中国南北朝時代の僧で、予言や神異を行い、観音の化身として信じられました。この不思議な造形は、面を裂き観音の姿をあらわしたという説話に基づくものです。宝誌の姿は奈良時代に中国から伝わったと考えられ、本像は日本で現存唯一の作例です。



国宝

けごんしゅうそしえでん ぎしやうえ
華嚴宗祖師絵伝 義湘絵 (部分) 鎌倉時代 13 世紀 京都・高山寺所蔵 [通期展示 ※巻替あり]

新羅の華嚴宗の僧・義湘 (625~702) が唐へ留学したとき美女・善妙より献身を受けた説話を、伸び伸びとした筆致で描いた国宝絵巻。舞台が異国であるため、輸入された中国の絵画を参考にして作画されており、とくに宋の「ききよらい 歸去来図巻」からの引用が明かです。



からもの な す ちやいれ つくも な す
唐物茄子茶入 付藻茄子

中国・南宋～元時代 13～14世紀 東京・静嘉堂文庫美術館所蔵
[前期展示 ※後期は同館所蔵《唐物茄子茶入 松本茄子(紹鷗茄子)》を展示]

足利義満、義政をはじめとした足利將軍家が愛蔵し、次々と所蔵者が変わり、ついには織田信長、豊臣秀吉といった天下人が手にするなど、広く名物茶器として知られた唐物の至宝。大坂夏の陣で被災し、焼け跡から発見された時にはひどく破損していましたが、丹念な漆の修繕により奇跡の再生を果たし、現在にまで受け継がれました。

せいじりん か ちやわん かすがい
青磁輪花茶碗 銘 銚

中国 南宋時代 13世紀 愛知・マスプロ美術館所蔵
[通期展示]

口縁から胴部にかけてひび割れた部分を 銚 で止め、口縁部には金継ぎを施した青磁輪花碗です。割れて修理されたことを欠点とせず、むしろこの茶碗の見どころとしてあらたな価値を見だし、長所としていることも本作の大きな魅力です。あえて完璧さを求めない、日本独特の感性といえるでしょう。



重要文化財 ちょうじゅうもんようつづれおりじんぼおり 鳥獣文様綴織陣羽織 豊臣秀吉所用

桃山時代 16世紀 京都・高台寺所蔵 [4月19日～5月11日展示]

豊臣秀吉の正妻おね／ねねゆかりの高台寺に伝来した秀吉所用の陣羽織です。孔雀や鹿、闘う動物や獣の頭部などが多彩な綴織であらわされています。特殊な金属糸の使用から、サファヴィー朝ペルシアの宮廷工房で製作された室内装飾品であったと考えられます。大航海時代の南蛮船によりもたらされ、武将の陣羽織に転用されました。





クリス インドネシア 16～17 世紀 京都・石清水八幡宮所蔵 [通期展示]

クリスとは、現在のインドネシアとマレー半島の周辺で広く用いられてきた伝統的な短剣。本品は、日本にいつどのようなようにもたらされたのか不明ですが、石清水八幡宮にて宝珠など、雨乞いの修法に関連した品とともに発見されました。蛇行する形状から発想を得て、雨乞いに用いられた可能性が想定されます。

ろうかくさんすい まきえすいちゆう
楼閣山水蒔絵水注

江戸時代 18 世紀 京都国立博物館所蔵
[通期展示]

アラブ世界の金属製の香油瓶や水注を原型に、中国で銅器や磁器に写された品を、日本で木製で作らせ、漆を塗り、金銀粉で装飾させた 18 世紀の輸出工芸。類品がフランスのルーヴル美術館にあり、これはもともとルイ 15 世の寵姫ポンパドゥール侯爵夫人の愛蔵品で、その後パリで金属装飾を加えられてルイ 16 世の妃マリー・アントワネットの所蔵となったものです。



じゅうはちらかんざぞう らごらそんじゃぞう ほんどうせい
十八羅漢坐像のうち羅怛羅尊者像 范道生作

江戸時代 寛文 4 年(1664) 京都・萬福寺所蔵 [通期展示]

中国人仏師・^{はんだうせい}范道生の代表作。范道生は^{おうぼく}黄檗宗の開祖・隠元禅師によって宇治の萬福寺に招かれ、仏像の制作を行いました。京都仏師もその造像を手伝い、范道生の作風は同時代の日本の仏師に影響を与え、黄檗様と呼ばれる新しい様式が生み出されました。羅怛羅は出家前の釈迦の子で、自分の中に仏がいるのだと胸を開いて見せています。

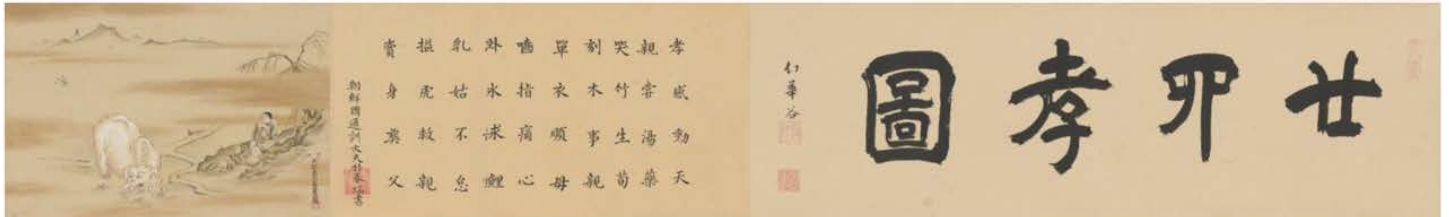


初公開!!

にじゅうしこうずかん 二十四孝図巻 乾巻（部分）土佐光祐ほか筆

江戸時代・正徳元年（1711）、享保4年（1719）[通期展示 ※巻替あり]

土佐光祐、鶴沢探山ら日本人画家24名の絵に、朝鮮通信使随員が序文等を寄せた合作。享保4年来聘の通信使製述官（書記官）申維翰の紀行文『海游録』に制作経緯が記されており、江戸からの帰路大坂に滞在していた一行のもとを儒学者雨森芳洲が訪れ、その依頼により序文が書かれたことがわかります。江戸時代における日朝間の文化交流を示す貴重な作品です。



関連情報

俵屋宗達の国宝「風神雷神図屏風」、初めてのフィギュア化が決定！

本展開催を記念して、会期中に限り数量限定で販売いたします。

※数量、販売価格については後日改めて発表します



可動フィギュアやカプセルフィギュア、さらにはこの俵屋宗達の作を模写した「尾形光琳筆 風神雷神図屏風」など、これまでも数多く「風神雷神」を立体化してきた海洋堂が、最新アップデートとして挑んだ国宝「風神雷神図屏風」展覧会限定フィギュア。日本画の真髄と進化した立体造形のコラボレーションをお手元でお楽しみください。

特別展「日本、美のるつぼ」限定 大本山 建仁寺公認 風神雷神フィギュア
(国宝「風神雷神図屏風」俵屋宗達筆 京都・建仁寺所蔵)

来春は関西2つの国立博物館で日本美術が熱い！

本展と同一会期で、【奈良国立博物館開館130年記念特別展「超 国宝－祈りのかがやき－」】を開催！

共通チケットなど両展を一緒に楽しむ企画は、決まり次第各展公式サイト等で紹介します。

(奈良国立博物館開館130年記念特別展「超 国宝－祈りのかがやき－」公式サイト：<https://oh-kokuho2025.jp/>)

報道関係のお問合せ

「日本、美のるつぼ展」広報事務局（ユース・プランニング センター内） 担当：平野・池袋
TEL: 03-6826-8853 FAX: 03-6821-8869 E-mail: rutsubo2025@ypcpr.com